鹿児島県総合教育センター

令和２年度長期研修研究報告書

研　究　主　題

児童が思いを意欲的に絵に表す図画工作科授業づくりの在り方
－表したい意欲を高め続ける指導－

鹿児島市立玉江小学校
教 諭　　山 下　泰 弘

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

Ⅱ　研究の構想
　１　研究のねらい・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　２　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
　３　研究の計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

Ⅲ　研究の実際
　１　研究主題（副題）についての基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　(1)　「意欲」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　(2)　自律的な学習意欲が必要な理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
　(3)　自律的な学習意欲を高め続けることが必要である理由・・・・・・・・・・・・・・・２
　２　児童の実態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　(1)　実態調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　(2)　実態調査の分析（児童の苦手意識について）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
　３　絵に表す活動で育成すべき資質・能力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　４　絵に表す意欲を高め続けるための教師の手立て・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　(1)　絵に表す意欲を高めるための手立てのポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
　(2)　絵に表す意欲を高め続けるための各過程での手立て・・・・・・・・・・・・・・・・５
　５　検証授業Ⅰの実際と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　(1)　検証授業Ⅰの視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　(2)　検証授業Ⅰの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　(3)　検証授業Ⅰの実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
　(4)　題材全体を通しての四つの苦手なことに対する意識と意欲の変容・・・・・・・・・・15
　(5)　検証授業Ⅰの成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　６　検証授業Ⅱの実際と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　(1)　検証授業Ⅱの視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　(2)　検証授業Ⅱの概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　(3)　検証授業Ⅱの実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
　(4)　資質・能力についての評価の具体化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　(5)　題材全体を通しての四つの苦手なことに対する意識と意欲の変容・・・・・・・・・24
　(6)　検証授業Ⅱの成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

Ⅳ　研究のまとめ
　1　成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　2　課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

※　引用・参考文献

Ⅰ　研究主題設定の理由

現代社会は，人工知能（AI）の劇的な進化等により大きな変化の時期にあり，今後，児童が生きていく時代は，厳しい挑戦の時代になると言われている。このような時代を生き，時代を創り出していく児童に身に付けてほしい力は，困難な問題にも前向きに取り組み，解決していこうとする「物事に意欲的に取り組む力」である。児童には，図画工作科において，意欲的に表現することに取り組むことを通して，「物事に意欲的に取り組む力」を身に付けてほしいと考える。

本校では，図画工作科の絵に表す活動の時間に，意欲的に自分の思いを絵に表す児童の姿が多く見られる。一方で，題材の前半でなかなか線描が進まない姿や，題材の後半で「先生，あと何をかいたらいいですか。」と内容について指示を求める姿，作品に自分の思いを表し切った充実感がないままに意欲を失い，早く表現を終わらせてしまう姿等を見かけることがあった。このように児童が意欲的に絵に表せない原因は，大きく三つに分けられると考える。第一に，思いを明確にもてていなかったり，発想が広がらなかったりしたために，意欲が高まらなかったことである。第二に，自分の思いをもてたもののイメージどおりにかけず，途中から意欲を失ってしまうことである。第三に，自分は絵がうまくないという思い込みから，意欲が高まらないことである。これらの他にも多様な原因があると考えられるが，共通するのは，教師が表現の最初の段階で児童に「表したい。」という意欲を高めさせることができなかったことと，児童が表現の途中で自分が絵に表したいことを思ったように表現できないという苦手意識から，活動への意欲を失っていくことではないかと考える。そしてそれは，絵に表す活動を通して育成すべき資質・能力について，教師が授業の中で明確に意識していなかったために適切な指導を行うことができず，児童が達成感を感じることができない状況を生んでしまったことが影響していたのではないかと考える。

これらのことから，全ての児童が，絵に表す活動に意欲的に取り組める授業をつくりたいという思いと，絵に表す活動を通して，児童の資質・能力を高めたいという思いから，本研究主題を設定した。本研究では，児童が意欲的に絵に表せない原因や，育成すべき資質・能力について具体化し，児童が意欲的に絵に表す授業づくりや指導の在り方を明らかにしていきたい。

Ⅱ　研究の構想

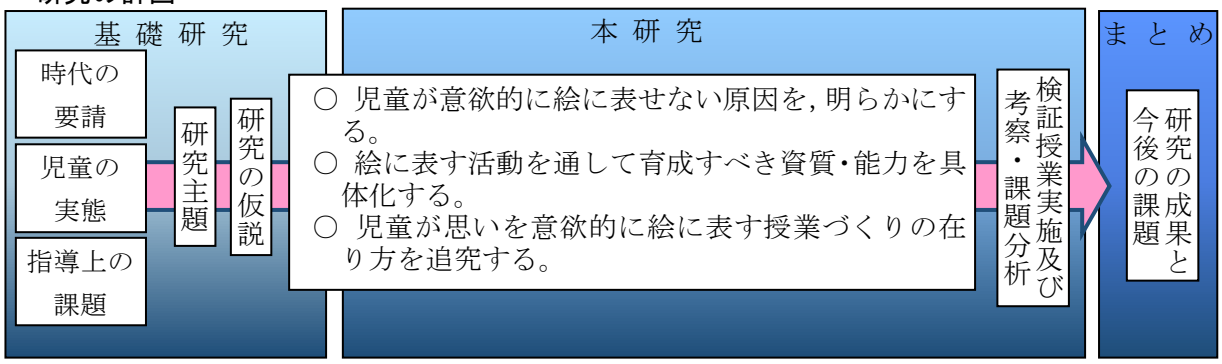
１　研究のねらい

⑴　児童への実態調査を行い，児童が意欲的に絵に表せない原因を明らかにする。
⑵　絵に表す活動を通して育成すべき資質・能力を具体化する。
⑶　児童が思いを意欲的に絵に表す授業づくりの在り方を追究する。
⑷　検証授業の分析を通して，研究の成果と課題を明らかにし，今後の研究の方向性を探る。

２　研究の仮説

児童の絵に表すことへの苦手意識を解消する授業をつくることができれば，絵に表す活動を通して育成すべき資質・能力を高め，表したい意欲を高め続けることができるのではないか。

３　研究の計画



Ⅲ　研究の実際

1　研究主題（副題）についての基本的な考え方

⑴　「意欲」とは

研究主題の「意欲的に絵に表す」と，副題の「表したい意欲」の「意欲」は，自律的な学習意欲のことである。櫻井*1)（2019）は，「学習意欲は自ら学ぶ意欲（自律的な学習意欲）と，他律的な学習意欲に分類されます。自ら学ぶ意欲（自律的な学習意欲）とは文字通り自発的に学ぼうとする意欲です（**図１**）。」と述べている。本研究で述べる「意欲」は，自分から湧き起こる学びたいという意欲であり，自ら主体的に絵に表していこうとする意欲である。

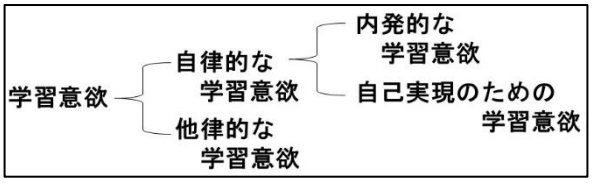


図１　学習意欲の分類

⑵　自律的な学習意欲が必要な理由

自律的な学習意欲の効果について，櫻井*1)（2019）は「自ら学ぶ意欲によって学んでいる場合には，知的好奇心や有能さへの欲求が作用するため，より深い学びが生じ，質的な面を中心に学業成績が向上，思考力や創造力も高まります。」と述べている。深い学びとは，小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総則編*2)（2018）によると,「習得・活用・探究という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう」学びのことである。図画工作科におけるい学びとは,「児童一人一人が主体的に『造形的な見方・考え方』を働かせて,表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させて発揮している状態」（鹿児島県総合教育センター*3),2018）である。これらのことから，自律的な学習意欲が低い場合は，主体的な表現や鑑賞が成立しないので，資質・能力を十分に育むことができないと考える。

⑶　自律的な学習意欲を高め続けることが必要である理由

堀*4)（2017）は，「『学習意欲』というものは二つの観点から考えなくてはならない。一つは言うまでもなく『初発の動機付け』だ。～（中略）～しかし，授業は時間が長い。いくら授業の冒頭で激しく意欲が喚起されたからといって子どもたちが45～50分もの間，その喚起された学習意欲を維持して，目を輝かせ続けると考えるのは，ナンセンスである。」と述べている。自分の授業を振り返った時，導入場面で意欲を高めた後，そのまま表現活動を続けさせていたために，児童が意欲を失い，次第に表現活動が進まなくなってしまっていた原因がここにあると考える。また堀は，「『学習意欲』のもう一つは,喚起された『学習意欲の持続性』なのである。～（中略）～喚起された意欲に『適度な刺激』を与え続けるということを同時に考えておかなければならないのである。」と述べており,導入場面で意欲を高めた後,展開場面以降での『適度な刺激』が,児童の意欲を高め続ける上で不可欠なことが分かる（**図２**）。本研究では，児童が意欲を失ってしまう原因を,苦手意識と捉え,その苦手意識を解消するための手立てを『適度な刺激』と考えた。また,その手立てを講じることで,苦手意識をもっている児童だけではなく，全ての児童の意欲を高めることにもつながると考える。

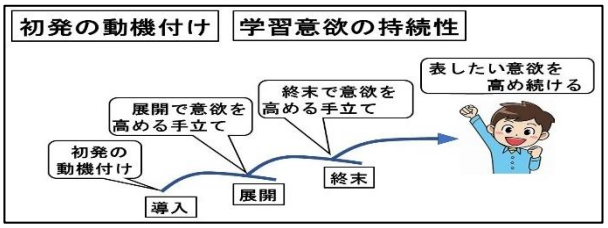


図２　二つの観点で意欲を高める

---

*1) 櫻井茂男　著　『自ら学ぶ子ども　４つの心理的欲求を生かして学習意欲をはぐくむ』　2019年　図書文化社
*2) 文部科学省　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編』　2018 年　東洋館出版社
*3) 鹿児島県総合教育センター　『小学校学習指導要領解説Ｑ＆Ａ図画工作科』　2018 年
*4) 堀裕嗣　著　『よくわかる学校現場の教育心理学―ＡＬ時代を切り拓く 10 講―』　2017 年　明治図書出版

２　児童の実態

⑴　実態調査の概要

ア　対　象　鹿児島市立玉江小学校第６学年４組　36人

イ　実施日　令和２年６月２日

ウ　方　法　質問紙法

エ　内　容　図画工作科の学習内容及び授業における児童の意識調査

⑵　実態調査の分析（児童の苦手意識について）

実態調査を分析したところ，児童が意欲を失うのは，大きく分けて次のア～エの四つの苦手意識が原因となっていることが分かった。

苦手意識の主な理由	人数	理由の考察
ア　絵で，何を表すか思い付かない。（発想）		
・　思いつかないから。 ・　細かいことを思い出せないから。	３人	・　児童が，表したい思いを明確にもつことができていなかったために，何を表せばよいのか発想することが十分にできていなかったことが原因であると思われる。
・　思いつくことができても，迷うから。	３人	・　児童が，表したい思いを伝えるには，どのようなものを表現したらいいか思い付かない状況であると考える。思いを基に表したいものを具体的に考えることが十分にできていなかったことが原因であると思われる。
・　無回答	２人	
イ　線描することが苦手である。（線描）		
・　イメージどおりに表せないから。	４人	・　児童が，自分の表したいイメージの中から何をかいていくのかを具体化できていなかったことが原因であると思われる。
・　遠近法ができないから。	１人	・　児童が，遠近法を必要としている時に，発達の段階に応じて学ぶことができていなかったことが原因であると思われる。
・　無回答	１人	
ウ　彩色することが苦手である。（彩色）		
・　細かい箇所を塗るのが難しいから。	７人	・　児童が，目的に応じた筆の使い方を意識していなかったことが原因であると思われる。
・　色の塗り方をよく知らないから。 ・　イメージどおりの色がつくれないから。 ・　どんな色で彩色したらいいのか分からないから。	10人	・　教師が色のつくり方について確認をしなかったり，色をつくって試す時間の確保が十分でなかったりしたことが原因であると思われる。 ・　児童が，重色や混色といった彩色の仕方について，十分に学ぶことができていなかったことが原因であると思われる。
・　無回答	３人	
エ　自分の作品を見せることに抵抗がある。（鑑賞）		
・　自分の作品は下手だから。 ・　馬鹿にされるから。 ・　友達の作品を見ると自信がなくなるから。	11人	・　児童が，出来映えが素晴らしい絵のことだけをよい絵だと捉える認識をもっていたことが原因であると思われる。 ・　児童が，鑑賞の時間は互いの作品のよさをを感じ取ったり，見方や感じ方を広げたりする時間であるという認識をもてていなかったことが原因であると思われる。
・　時間内に終わらず，完成していないのを見せたくないから。	１人	・　児童が，学習への見通しが十分ではなかったために，作品を完成できないまま鑑賞していたことが原因であると思われる。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　図画工作編*5)（2018）には，「高学年は個性の違いが目立つようになり表したいことの違いも顕著にあらわれてくる。一方，ある表現形式に対して苦手意識をもったり，感じたことや考えたことを話すことを躊躇したりすることや，自分が表したいことやもののイメージと，実際に表したこととの違いを感じ，表現することに苦手意識をもつこともある。この時期の児童の特徴を踏まえた指導計画を作成することが重要である。」とあるように，児童のもつ苦手意識を解決する手立てを講じる必要がある。

*5) 文部科学省　『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　図画工作編』　2018年　日本文教出版

３　絵に表す活動で育成すべき資質・能力

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説図画工作編を基に，第５・６学年の「絵に表す活動で育成すべき資質・能力」についてまとめると次のようになる。

⑴　知識及び技能
　ア　知識
　　自分の感覚や行為を通して，形や色などの造形的な特徴を理解すること。
　イ　技能
　　表現方法に応じて材料や用具を活用するとともに，前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしたり，表現に適した方法などを組み合わせたりするなどして表したいことに合わせて表し方を工夫して表すこと。
⑵　思考力，判断力，表現力等
　ア　発想・構想の能力
　　形や色などの造形的な特徴を基に，自分のイメージをもちながら，感じたこと，想像したこと，見たこと，伝え合いたいことから，表したいことを見付け，形や色，材料の特徴，構成の美しさなどの感じ，用途などを考えながら，どのように主題を表すかについて考えること。
　イ　鑑賞の能力
　　形や色などの造形的な特徴を基に，自分のイメージをもちながら，自分たちの作品の造形的なよさや美しさ，表現の意図や特徴，表し方の変化などについて，感じ取ったり考えたりし，自分の見方や感じ方を深めること。
⑶　学びに向かう力，人間性等
　　つくりだす喜びを味わい主体的に表現したり，鑑賞したりする学習活動に取り組むこと。

絵に表す活動で育成すべき資質・能力と２の実態調査における苦手意識を比較すると，この二つは関連していることが分かる(下線部)。これらの資質・能力を育成するための手立てが不足していたために苦手意識が生じていたのではないかと考える。つまり，児童の絵に表す活動における苦手意識を解消することが，絵に表す活動で育成すべき資質・能力を育成することになり，それが児童の絵に表す意欲を高め続けることにつながると考える。

４　絵に表す意欲を高め続けるための教師の手立て

⑴　絵に表す意欲を高めるための手立てのポイント

辰野*6)（2009）を参考にして，絵に表す意欲を高めるための手立てのポイントを**図３**のように整理した。

【Ａ】　児童が考えやすく，理解しやすくなるような手立てを講じることによって，興味をもたせ，意欲を高める。
【Ｂ】　題材全体の見通しをもたせることによって,学習に興味をもたせたり，振り返りを通して，自分の学びの成長を実感させたりして，意欲を高める。
【Ｃ】　苦手意識を解消できそうだという見通しをもたせることによって，意欲を高める。
【Ｄ】　技能を教える（道具の使い方の指導も含む）ことによって，意欲を高める。
【Ｅ】　児童同士の話合い等でお互いに協力させることによって，意欲を高める。
【Ｆ】　本時で取り組むことを具体化し,見通しをもたせることによって，意欲を高める。
【Ｇ】　互いのよさを認め合わせることによって，意欲を高める。
【Ｈ】　教師が児童のよさを称賛することによって，意欲を高める。

図３　絵に表す意欲を高める手立てのポイント

また櫻井*1)（2019）は，自律的な学習意欲が発現するプロセスに影響する三つの重要な要因として，「安心して学べる環境」，「メタ認知能力」，「情報」を挙げている。「安心して学べる環境」とは，物理的に安全な環境と対人的に安全な環境のことである。「メタ認知能力」とは，自分の学習状態を自分の外側から見て理解したり，調整したりする能力のことである。「情報」とは，授業や児童がもっている知識，教師や級友，親など周囲の人が与えてくれるその他の情報のことである。**図３**で示した絵に表す意欲を高める手立てのポイントを，**図４**のように三つの要因ごとに分類した。全てのポイントがこの三つの要因に当てはまることから【Ａ】～【Ｈ】までの手立ては，自律的な学習意欲を発現・持続させるために必要であることを確認することができた。

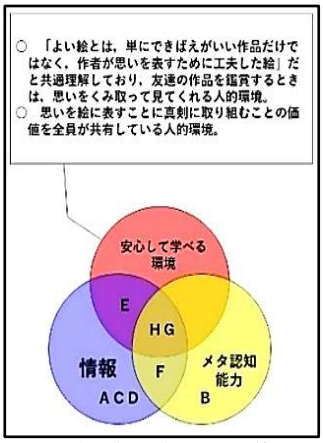


図４　自ら学ぶ意欲を発現・持続させるプロセスに影響する三つの要因

*6) 辰野千壽　著『科学的根拠で示す学習意欲を高める12の方法』2009年　図書文化社

⑵　絵に表す意欲を高め続けるための各過程での手立て

実態調査の結果と育成すべき資質・能力，**図３**の【Ａ】～【Ｈ】の手立てのポイントを基に，絵に表す意欲を高め続けるための具体的な手立てをア～エの四つに分類し，具体化した（**表１**）。表中の「主な資質・能力」の欄には，手立てを通して育成する主な資質・能力を挙げた。なお，「学びに向かう力，人間性等」については，全ての過程を通して育成するものとして省略した。

表１　絵に表す意欲を高め続けるための各過程での手立て

過程	教師の手立て	具体的な内容	主な資質・能力
思いをもつ・見通す	**ア　思いをもち，何を表すか思い付くことで意欲を高める手立て（発想）**		
	①　題材に興味をもたせる。	【A】【B】 児童が興味をもち，学習内容を想起しやすくするような題材名を提示する。	発想・構想
	②　思いをもち，形や色を工夫して伝えることの大切さに気付かせる。	【A】【B】【E】【F】【H】 何を表すか思い付けるように，参考作品を提示し，絵に表す際は，思いをもつことが大切であることと，〔共通事項〕に気付かせることによって工夫する方向性を見付けさせる。	知識 発想・構想 鑑賞
	③　学習の見通し・振り返りを通して意欲を高める。	【B】【F】【H】 学習の流れを提示すると共に，見通し・振り返りワークシートを配布し題材の学習内容について見通しをもたせたり，授業で学んだこと等を，ワークシートに記入させることを通して，自分の成長を実感させ，次の学習に向けての意欲を高めさせたりする。	知識，技能 発想・構想 鑑賞
	④　出来事や，読書感想画に表す本の例を提示する。	【A】【C】【F】 児童が絵に表す時，主題や，何を表すか思い付かず発想できない児童のために，出来事や読書感想画に表す本の例を提示して，絵に表そうとする意欲を高める。	発想・構想
	⑤　思いを明確にさせる。 （ワークシート①）	【A】【F】 思いが曖昧だと発想が広がりにくいので，ワークシートを配布し，思いを言葉にさせることで明確にする。	発想・構想
	⑥　思いを広げさせる。 （ワークシート①）	【A】【C】【F】【H】 絵に表したいことを思い付かないのは，発想を広げること自体が難しいのが原因なので，思いを基に「人・物・こと・時・場所・形・色」等を視点としてイメージを言葉にさせてイメージマップを作らせる。	知識 発想・構想
表す	**イ　思いが伝わるように形を工夫して線描させることで意欲を高める手立て（線描）**		
	①　構図をイメージさせる。 （ワークシート②）	【A】【C】【F】【H】 表したいものを，画面に構成することができるように，イメージマップの言葉を手がかりに，どのように絵に表すか，どのような構図にするかアイデアスケッチで数多く試させて発想を広げさせる。最終的には自分のイメージに合う構図を決めさせる。	発想・構想
	②　線描に向けて見通しをもたせる。 （中間鑑賞）	【A】【C】【E】【F】【G】 アイデアスケッチ等を見せながら，児童自身の思いと工夫を言葉にして伝えさせることで，自分の思いを明確にさせる。また，友達からのアドバイスを基に，多様な視点で自分のアイデアスケッチを見つめさせ，新たな発想を得させるようにする。	知識 発想・構想 鑑賞
	③　アイデアスケッチを基に指がきさせる。	【A】【F】 アイデスケッチを基に画用紙に線描する際は，画用紙にどのくらいの大きさで線描するかイメージさせるために指がきをさせて見通しをもたせることで意欲を高める。	技能
	④　資料などを参考にさせる。	【A】【C】【F】 動物・乗り物・建物等の具体物を絵に表すことに苦手意識をもっている児童の中には，本物の様子を見たいと思っている児童もいるので，必要に応じて図鑑等を参考にできるようにする。また，人物についても，必要に応じて友達にポーズをとってもらい，イメージを具体化できるようにする。	知識 技能
	⑤　形を工夫して線描しているところを称賛する。	【C】【D】【H】 思いが伝わるように形を工夫しているところを称賛し，意欲を高める。	知識，技能 発想・構想 鑑賞
	⑥　振り返りを通して意欲を高める。	【B】【H】 授業で学んだことやできたこと等を，ワークシートに記入させることを通して，自分の成長を実感させ，次の学習に向けての意欲を高める。	知識，技能 発想・構想 鑑賞
	ウ　思いが伝わるように色を工夫して彩色させることで意欲を高める手立て（彩色）		
	①　彩色を工夫させる手立て（a～e）		
	a　筆洗・パレットの使い方を確認する。	【A】【C】【D】 イメージしたような，きれいな色で彩色できないという苦手意識を解消するために，筆洗やパレットの使い方を確認する。	技能
	b　パレットに絵の具を全色出させる。	【A】【C】【D】 イメージした色をつくれない児童は，この色は使わないだろうという思い込みから，パレットに出す色数が少ないことが多いので，パレットに絵の具を全色出させて，どのような色でもつくれるという認識から彩色への意欲を高める。	技能
	c　重色・混色について理解させる。	【A】【C】【D】 うまく彩色できないという苦手意識を解消するために，パレット上で色を混ぜる混色に加え，画面上で色を重ねることによって色をつくる重色の方法を教え，一つの表現方法として提案する。	知識 技能
	d　色の仕組みについて気付かせる。	【A】【C】【D】 12色相環図を用いて色の仕組みに気付かせ，混色の方法に見通しをもたせる。	知識 技能
	e　細かい箇所を彩色させる。	【A】【C】【D】 細かく線描したところを彩色する際には，筆を工夫して活用することを必要に応じて示す。	技能
	②　色を工夫して彩色しているところを称賛する。	【C】【D】【H】 思いが伝わるように色を工夫しているところを称賛し，意欲を高める。	知識，技能 発想・構想 鑑賞
	③　仕上げの彩色に向けて見通しをもたせる。	【A】【C】【E】【F】【G】 児童自身の思いとそれまでの工夫を言葉にして伝えさせることで，次の活動に向けての意欲を高める。また，友達からのアドバイスを基に，多様な視点で自分の作品を見つめさせ，新たな発想を得させるようにする。	知識・鑑賞
	④　仕上げを意識させる。	【F】 中間鑑賞で，仕上げで頑張ることを記入したワークシートや友達からのアドバイスを基に仕上げさせることによって，意欲を高める。	技能 発想・構想
	⑤　振り返りを通して意欲を高める。	【B】【H】 授業で学んだことやできたこと等を，ワークシートに記入させることを通して，自分の成長を実感させ，次の学習に向けての意欲を高める。	知識，技能 発想・構想 鑑賞
味わう	**エ　題材全体を，作品の鑑賞等を通して振り返らせることで，意欲を高める手立て（鑑賞）**		
	①　お互いの作品のよさを認め合えるようにさせる。	【C】【G】 友達の作品を，〔共通事項〕を視点として鑑賞し，思いが表れているところをよさとして見付けさせる。作品のよさを伝え合うことを通して，自分の取組のよさに気付かせ，次の題材への意欲付けとする。	知識 鑑賞
	②　題材全体を振り返らせる。	【B】 題材全体を通して学んだことや，できたこと等をワークシートに記入させることを通して，自分の成長を実感させ，次の題材への意欲を高める。	知識，技能 発想・構想 鑑賞

5　検証授業Ⅰの実際と考察

⑴　検証授業Ⅰの視点

視点１　意欲を自発的に高め，持続させるための手立ては適切か。 視点２　資質・能力を育成する手立ては適切か。

⑵　検証授業Ⅰの概要

ア　検証授業Ⅰの題材名及び実施学年等

題 材 名	「伝えたい，ぼくの私の心ゆさぶられた思い出」（絵に表す）
材　　料	画用紙【八つ切】（ケント紙，水彩紙,キャンパス画用紙から選択）
対　　象	鹿児島市立玉江小学校第６学年４組　34 人
実施時期	令和２年６月17日，25日，７月２日【各２時間,計６時間】

イ　題材について

本題材は,心をゆさぶられた思い出を想起し，絵に表したい思いを，水彩絵の具等を使いながら絵に表す題材である。思いを表すために，思い出の中の人・物・こと・時・場所・思い等を，形や色を試行錯誤しながら表すことによさがある。本題材では，児童の苦手意識に対して手立てを講じることで,児童が意欲的に絵に表し続けることをねらいとする。

ウ　題材の目標

(ｱ)　知識及び技能

・　思い出を絵に表す活動を通して，形や色の造形的な特徴を理解することができる。

・　表現に適した方法を組み合わせるなどして，表したいことに合わせて工夫して表すことができる。

(ｲ)　思考力，判断力，表現力等

・　思い出の中から主題を設定し,どのように主題を表すかについて考えることができる。

・　作品の表し方の工夫などについて感じ取ったり考えたりし，見方や感じ方を深めることができる。

(ｳ)　学びに向かう力，人間性等

絵に表したり，自他の作品を鑑賞したりする活動に，意欲を高め続けながら取り組み，つくりだす喜びを味わうことができる。

エ　題材の指導計画（全６時間）

過程	次	主な学習活動	指導の手立て 〈視点１〉各過程での意欲を高め続けるア～エの手立て 〈視点２〉主な資質・能力	
			視点１	視点２
思いをもつ・見通す	一次（二時間）	１　題材と出会う。	ア①　児童に興味をもたせるために題材名を工夫して提示する。	発想・構想
		２　参考作品を鑑賞する。	ア②　心を揺さぶられた思い出について絵に表した教師の参考作品を鑑賞させる。	知識 発想・構想 鑑賞
		３　学習の流れを知る。	ア③　全６時間の主な学習の流れを提示する。	意欲
		４　心を揺さぶられた思い出を思い出す。	ア④　心を揺さぶられた思い出の例を提示する。	発想・構想
		５ 思いをワークシートに記入する。	ア⑤　絵に表したい心を揺さぶられた思いを記入させる。（ワークシート）	発想・構想
		６　イメージマップを書く。	ア⑥　心を揺さぶられた思い出から想起することを，イメージマップに記入させる（ワークシート）。	知識 発想・構想 鑑賞

表す	一次（二時間）	7　アイデアスケッチをかく。	イ①　イメージマップを基に，前・後等からの視点でアイデアスケッチをかかせる（ワークシート）。	発想・構想
		8　アイデアスケッチを基に，画用紙に指がきする。	イ③　アイデアスケッチを基に，画用紙に線描する大きさを想像しながら指がきさせる。	技能
		9　必要な児童は図鑑等を参考にする。	イ④　画用紙に線描する際に，人物等をかくのに難しさを感じている児童には声を掛け，必要に応じて，図鑑等を参考にさせる。	知識，技能
		10　思いが伝わるように線描する。	イ⑤　思いが伝わるように表情等の形を工夫している児童の頑張りを称賛する等して，肯定的に評価する。	技能
		11　１～10 の振り返りをする。	イ⑥　振り返りのワークシートに記入させる。	意欲
	二次（二時間）	1　筆洗・パレットの使い方を知る。	ウ①ａ　筆洗・パレットの使い方について，師範する。	技能
		2　パレットに絵の具を全色出す。	ウ①ｂ　パレットに絵の具を，少しずつ全色出させる。	技能
		3　重色の仕方を知る。	ウ①ｃ　３枚の教師による参考作品を提示しながら，彩色の仕方を指導する。	技能
		4　色のつくり方等を知る。	ウ①ｄ　色のつくり方等を，パレットの使い方に注意して指導する。	知識，技能
		5　細かい線描個所の彩色の仕方を知る。	ウ①ｅ　細かい箇所の彩色の仕方を，師範する。	技能
		6　思いが伝わるように彩色する。	ウ②　思いが伝わるように，色を工夫している児童の頑張りを称賛する等して，肯定的に評価する。	技能
		7　１～６の振り返りをする。	ウ⑤　振り返りのワークシートに記入させる。	意欲
	三次（二時間）	1　中間鑑賞をする。	ウ③　中間鑑賞で，他の児童の思いや形，色の工夫を見付けたり，仕上げに向けたアドバイスを出させたりする。	鑑賞
		2　絵を仕上げる。	ウ④　中間鑑賞での友達からのアドバイス等を基に，思いが表れるように形や色の工夫を意識させて仕上げをさせる。	技能
味わう		3　相互鑑賞をする。	エ①　友達のよさを記入させるワークシートを用意して相互鑑賞をさせる。	知識 鑑賞
		4　振り返りをする。	エ②　題材全体での自分の成長を実感させるために振り返りをさせる。	意欲

⑶　検証授業Ⅰの実際

ア～エの①～⑥の手立てはp. ５**表１**の各過程及びpp. ６～７の指導計画の手立てを示す。

ア　思いをもち，何を表すか思い付くことで意欲を高める手立て（発想）

絵に表す際にどのような思いを表現するのか，また，発想を広げ，どのような内容を表現するのかを明らかにするために，児童の思考に気を配りながら，順を追って手立てを講じた。

(ｱ)　手立ての具体化

① 題材に興味をもたせる。

児童が，題材に興味をもって，「よし，やってみよう。」と思わせるような題材名を設定した。『図画工作５・６年下　見つめて広げて』（日本児童美術研究会*7)，2015)での題材の例は，「わたしの大切な風景」であったが，風景ではなく，心の中の思い出の風景を表現させたいと考え，「伝えたい，ぼくの私の心ゆさぶられた思い出」（**図５**）という題材名を提示し，自分の思いを伝えることを意識させた。題材名から題材に興味を示す児童の姿が見られた。

図５　題材名

② 思いをもち，形や色を工夫して伝えることの大切さに気付かせる。

参考作品（**図６**）を全員で鑑賞する中で，作品から伝わってくる思いについて児童に考えさせたところ，「赤ちゃんを抱っこしているお父さんの姿から，幸せな感じが伝わってくる。」等の発言があった。作品には作者の思いが表れていることから，伝えたい思いをもつことの大切さに気付かせることができた。また児童は，作者の工夫を見付けることを通して，形や色等の〔共通事項〕を視点として，思いを表すために工夫することの大切さに気付くことができた。

図６　参考作品

③ 学習の見通し・振り返りを通して意欲を高める。

どのような学習を，どの時間で行うか知らせることによって児童が見通しをもち，意欲的に取り組めるように，題材全体の学習内容を記した学習の流れ（**図７**）を提示した。また全６時間の学習内容と学習の自己評価欄等を設けた「見通し・振り返りワークシート」（**図８**）を配布した。学習の流れを見た児童からは，「彩色の後に，中間鑑賞がある。」，「鑑賞が３回ある。」等のつぶやきが聞かれ，学習の流れを見通し興味をもつ姿が見られた。

学習の流れ
1　参考作品の鑑賞
2　発想する
3　アイデアスケッチ
4　線をかく
5　彩色する
6　中間鑑賞
7　仕上げる
8　終末の鑑賞
9　振り返る

図７　学習の流れ

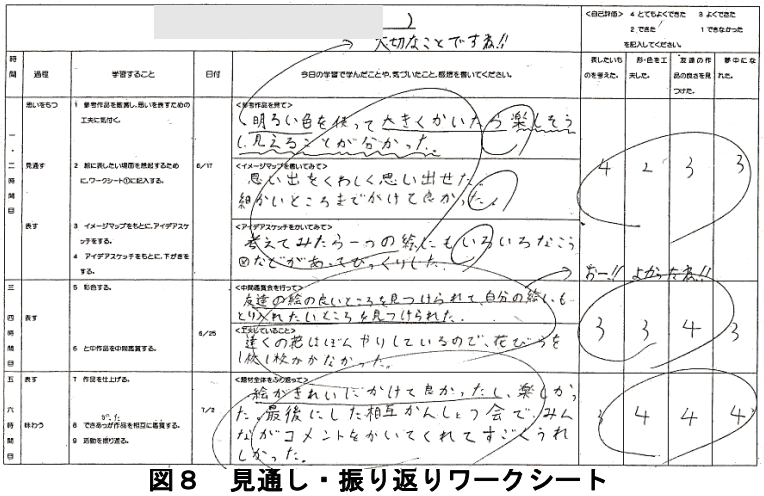


図８　見通し・振り返りワークシート

*7) 日本児童美術研究会　『図画工作５・６年下　見つめて広げて』2015年　日本文教出版

④　出来事の例を提示する。

実態調査から，児童が発想に苦手意識をもっていることが分かったので，心揺さぶられた出来事を思い出しやすくするために，児童が感動したと思われる出来事を「出来事の例」としてまとめ，プリント（**図９**）で配付し，思い付かない児童には，参考にするように声を掛けた。児童からは，「こんなことがあった。思い出した。」という声が聞かれた。

【出来事の例】

※大会関係は，練習風景も思い出してみてください。

- サッカーでゴールをきめた時　・花火大会
- 野球などのスポーツの試合　・花を見た時
- 宿泊学習　・遠足　・運動会　・動物園
- 家族の思い出（動物園，水族館，旅行等）
- 鹿児島市音楽発表会　・校内長縄大会
- お祭り　・陸上記録会　・サーカス
- 昼休みに友達と遊んだこと
- 調理実習　・持久走大会
- 水泳記録会　・Ｔステ

図９　出来事の例

⑤　思いを明確にさせる。

通常であれば表したい思いを短い言葉で表現しがちであるが，思いをワークシートに詳しく書かせたことにより，児童は思いを言葉で整理し，明確にすることができていた（**図 10**）。表現する中で，思いを確かめるために，このワークシートを繰り返し活用した。

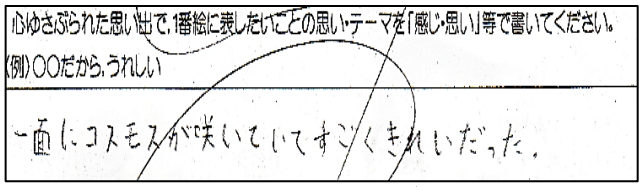


図 10　思いの明確化

⑥　思いを広げさせる。

思いから発想を広げるために，イメージマップを用いた。「人・物・こと・時・場所・形・色」等を視点として，思い浮かんだ言葉を書き，連想される言葉を線でつないで発想を広げるようにした。活動に際しては，見通しをもって取り組めるように書き方のモデルを示した（**図 11**）。最終的には，イメージマップの中で絵に表したい内容を〇で囲ませ，実際に絵に表す内容を決めさせることができた（**図 12**）。

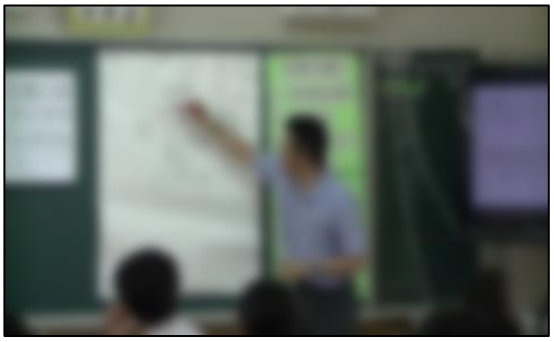


図 11　イメージマップのモデル

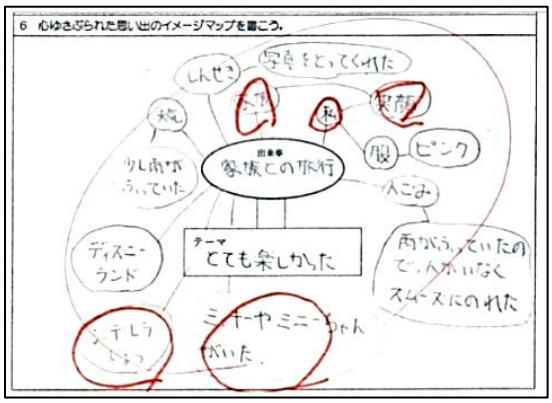


図 12　児童のイメージマップ

(ｲ)　苦手意識の変容

表２は「絵で，何を表すか思い付くことについての自己評価」であり，**表３**は「表したいものを考えた時の意欲についての自己評価」である。

表２　絵で，何を表すか思い付くことについての自己評価

自己評価	４　とてもよくできた	３　よくできた	２　あまりできなかった	１　できなかった
授業後の人数	22 人	７人	５人	０人
苦手意識をもつ児童（再掲）	５人	２人	１人	０人

表３　表したいものを考えた時の意欲についての自己評価

その時の意欲	４ とてもあった	３ あった	２ あまりなかった	１ なかった
授業後の人数	22 人	７人	５人	０人
苦手意識をもつ児童（再掲）	４人	２人	２人	０人

どちらも「４」と「３」の人数が多いので概ね目標に達していると考える。しかし，授業前に苦手意識をもっていた児童の中で，何を表すか思い付くことが「あまりできなかった」児童が１人おり（**表２**），表したいものを考えた時の意欲が「あまりなかった」児童が２人いる（**表３**）。また，他にも新たに「あまりできなかった」思いを抱いている児童もいた。理由として，「イメージマップが広がらない。」，「何があったか思い出せない。」等が挙げられていたので，次時では教師が導入から積極的に児童に話し掛け，そのときの状況を，「人・物・こと・時・場所・形・色」等を視点としながら会話することで，イメージを広げることができた。

イ　思いが伝わるように形を工夫して線描させることで意欲を高める手立て（線描）

表したいもののイメージと，実際に表したものとの違いから意欲を失わないように，充実した線描にするための手立てを講じた。

(ｱ) 手立ての具体化

① 構図をイメージさせる。

イメージマップを基に，小さな四角の枠の中に簡単なアイデアスケッチを数多くかかせた。その際，場面を変えたり，前・後・横等の視点を変えたりして，かいてみるように助言した。児童は，アイデアスケッチに取り組むことを通して多様な構図を試すことができていた（**図 13**）。その後，表したアイデアスケッチの中から実際に表したい構図を決めさせた。

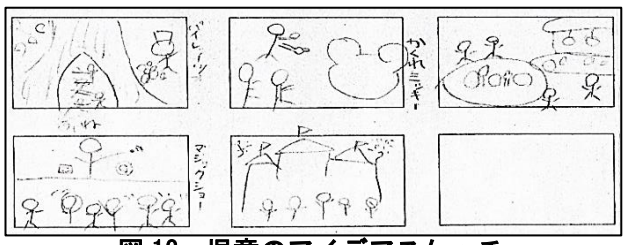


図 13　児童のアイデアスケッチ

② 線描に向けて見通しをもたせる。（中間鑑賞）　※検証授業Ⅱでの実施内容

③ アイデアスケッチを基に線描させる。

アイデアスケッチの大きさと，画用紙の大きさが異なるので，アイデアスケッチから画用紙に線描する時は，画用紙の大きさに合わせて，適切な大きさで表すことができるように気を付けさせる必要がある。画用紙でどのくらいの大きさで線描するか指がきをさせて見通しをもたせてから線描させるようにした。児童は「この位の大きさかな。」とつぶやきながら指がきし，大きさを確認する姿が見られた。

④ 資料などを参考にさせる。

人の姿を絵に表すことに苦手意識をもっている児童がおり，自分がかいたものを見て，意欲を失わないように，必要とする児童には，友達にポーズをとってもらい，それを参考に線描するようにアドバイスをした。実際に友達にポーズをとってもらい，形を確かめる児童もおり，人が動いている様子を表現できたことに満足している姿が見られた。

⑤　形を工夫して線描しているところを称賛する。

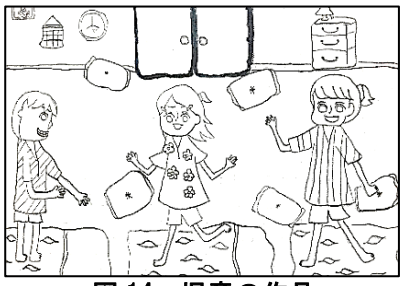


図 14　児童の作品

机間指導の中で，「人の表情がいいね。」，「思いがはっきりと伝わってくる構図だね。」等と，自分の思いを形の工夫によって表しているところ（**図 14**）を称賛した。工夫して表すことの大切さに気付かせ，同時に意欲を高めた。形を工夫して，線描している児童の姿が多く見られた。

⑥　振り返りを通して意欲を高める。

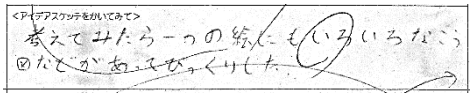


図 15　児童の振り返り

見通し・振り返りワークシートに記入させることを通して，アイデアスケッチ等（**図 15**）について振り返らせ，学習でできるようになったことや学んだことに気付かせた。次の図工の授業も頑張りたいという声が聞かれ，次時の学習への意欲を高めていた。

(ｲ) 苦手意識の変容

次の**表４**は「線描についての自己評価」であり，**表５**は「線描した時の意欲についての自己評価」である。

表４　線描についての自己評価

自己評価	４　とてもよくできた	３　よくできた	２　あまりできなかった	１　できなかった
授業後の人数	11 人	13 人	10 人	０人
苦手意識をもつ児童（再掲）	４人	１人	１人	０人

表５　線描した時の意欲についての自己評価

その時の意欲	４　とてもあった	３　あった	２　あまりなかった	１　なかった
授業後の人数	22 人	７人	４人	１人
苦手意識をもつ児童（再掲）	５人	０人	０人	１人

表４では，授業前に苦手意識をもっていた児童について，６人中５人が「とてもよくできた・よくできた」と回答しているが，新たに９人が「あまりできなかった」と回答しており，児童にとっては線描することが難しいことが改めて分かった。

しかし，**表５**では，苦手意識をもっていた６人中５人が「とてもあった」と回答しており，意欲が下がらなかったことが分かった。一方で「あまりなかった」と回答した４人は，「人をかくのに苦労した。」，「どんな大きさにするか迷った。」，「下がきで決まるから。緊張してかけなかった。」等のイメージどおりにかけないことへの不安を挙げていた。意欲が「なかった」と回答した１人は，「こだわりをもってかいていた魚をうまくかけなかったから。」と答えており，これらの児童には，次の活動の際に声を掛けて，それぞれの悩みについての解決策を一緒に考えることができた。

ウ　思いが伝わるように色を工夫して彩色させることで意欲を高める手立て（彩色）

彩色について悩み，苦手意識をもっている児童が多いので，水彩絵の具の使い方の基本的な内容の確認をすると同時に，彩色の方法について説明した。

(ｱ)　手立ての具体化

①ａ　筆洗・パレットの使い方を確認する。

意図せずに色が濁ってしまうことから苦手意識をもつことがあるので，中学年での既習事項であるが，**図 16** を示し，筆洗を，筆を洗う部屋・すすぐ部屋・色をつくる部屋に分けて使うことで濁りを抑えることができることや，パレットで色をつくる時は，広い場所を使う等の使い方について具体的に確認した。

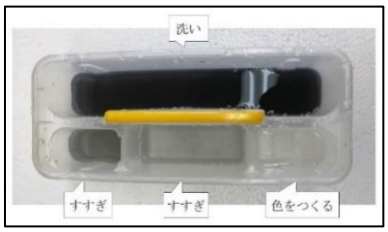


図 16　筆洗の使い方

①ｂ　パレットに絵の具を全色出させる。

パレットに出している色数が少ないと試行錯誤しても児童の表したい色に近付けるのが難しいので，**図 17** のモデルを示し，パレットに絵の具を全色出させるようにした。児童は混ぜる色を増やしたり，色の変化を生み出したりすることができていた。

図 17　絵の具を全色出させる

①ｃ　重色・混色について理解させる。

彩色の方法を知ることによって，より表したいイメージに近付きやすくなるので，ベタ塗りした作品（**図 18**），薄く彩色した作品（**図 19**），重色した作品（**図 20**）の３枚の参考作品を提示し，受け取る感じの違いを考えさせたところ，児童はそれぞれによさがあることに気付いていた。これまで児童が体験したことがない重色について説明を行い，彩色で活用できるようにした。重色に挑戦する児童が数多く見られた。

図 18　ベタ塗りした作品

図 19　薄く彩色した作品

図 20　重色した作品

①ｄ　色の仕組みについて気付かせる。　※検証授業Ⅱでの実施内容

①ｅ　細かい箇所を彩色させる。

細かく線描した個所を，彩色することに苦手意識をもった児童がいるので，細かく線描した個所は，輪郭線に沿って，小筆でゆっくり彩色するよう指導すると共に，彩色する箇所によって筆を使い分けるように個別に指導をした。細かく線描した個所を，小筆でゆっくり彩色する児童の姿が見られた（**図 21**）。

図 21　細かい箇所を彩色する様子

② 色を工夫して彩色しているところを称賛する。

図 22　児童を称賛する様子

机間指導の中で，「思いに合うようにこの色にしているんだね。」，「この色から思いが伝わってくるよ。」等，思いを色の工夫によって表しているところを，称賛した（**図 22**）。机間指導での称賛を通して，工夫して表すことの大切さに気付かせ，同時に意欲を高めた。自分の思いを表すために，彩色を工夫する児童の姿が見られた。

③ 仕上げの彩色に向けて見通しをもたせる。

中間鑑賞会の進め方

（方法）

1　作品が表している出来事・思い・工夫しているところや，今後の見通しについて説明する。一人３分以内。

2　グループのメンバーは，

（１）作品のいいなと思うところを必ず伝える。

（２）アドバイスをする。

（わたしだったら，ぼくだったら）

3　今後の仕上げに向けてがんばることをメモする。

図 23　中間鑑賞の進め方

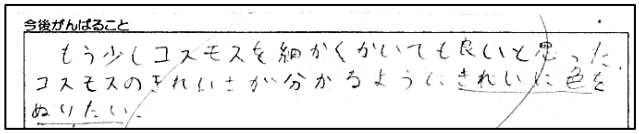
彩色の場面の終盤に，仕上げに向けて見通しをもたせるために中間鑑賞を行った。児童にとって初めての中間鑑賞であったので，まず中間鑑賞の方法について**図 23** を掲示して説明を行った。次に，グループで一人ずつ自分の絵を見ながら表したい思いと，思いを表すための形や色の工夫を発表させた（**図 24**）。説明を聞いた児童は，作品のよかった点を述べてから，仕上げに向けたアドバイスを伝えることができていた。

僕の思い出は家族との旅行です。表したい思いは「家族と行った旅行のとっても楽しかったこと」です。工夫したことは家族の表情です。仕上げは重色をしようと思っています。

Ａ君の作品のいいところは，一人一人の家族の表情が違っているところだと思います。あとは，もっと楽しそうな色にしてみるのもいいと思います。

図 24　中間鑑賞の様子

④ 仕上げを意識させる。



今後がんばること

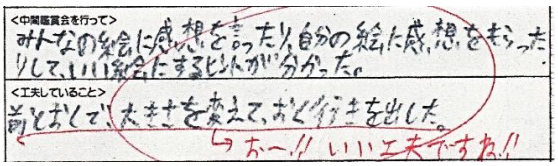
もう少しコスモスを細かくかいても良いと思った。コスモスのきれいさが分かるようにきれいな色をぬりたい。

図 25　児童が書いた仕上げで頑張ること

中間鑑賞では，グループ全員の発表後に，友達からのアドバイス等を基に，仕上げに向けて頑張ることをワークシートに書かせた（**図 25**）。児童は，このワークシートを基に，仕上げを行うことができた（**図 26**）。題材の終盤で，「あと何をかいたらいいですか。」とか，「先生これでいいですか。」といった質問する姿は見られなかった。

図 26　仕上げの様子

⑤ 振り返りを通して意欲を高める。



<中間鑑賞会を行って>

みんなの絵に感想を言ったり，自分の絵に感想をもらったりして，いい絵にするヒントが分かった。

<工夫していること>

前とおくで，大きさを変えて，おく行きを出した。

↳ おー!! いい工夫ですね!!

図 27　児童の振り返り

見通し・振り返りワークシートに記入させることを通して，中間鑑賞や工夫したことについて振り返らせることで，できるようになったことや学んだことに気付かせ，次時の学習への意欲を高めた（**図 27**）。

次の授業では，絵を完成させたいと発言する児童が多く見られた。

(ｲ) 苦手意識の変容

次の**表６**は「彩色についての自己評価」であり，**表７**は「彩色した時の意欲についての自己評価」である。

表６　彩色についての自己評価

自己評価	４　とてもよくできた	３　よくできた	２　あまりできなかった	１　できなかった
授業後の人数	17 人	11 人	６人	０人
苦手意識をもつ児童（再掲）	11 人	７人	２人	０人

表７　彩色した時の意欲についての自己評価

その時の意欲	４　とてもあった	３　あった	２　あまりなかった	１　なかった
授業後の人数	23 人	６人	３人	２人
苦手意識をもつ児童（再掲）	14 人	４人	２人	０人

表６では苦手意識をもっていた 20 人中 18 人は，「とてもよくできた・よくできた」と回答していたが，新たに４人が苦手意識をもち，「つくりたかった色をつくれないから。」等の回答をしている。イメージどおりに色をつくれないことが課題であり，さらに手立てを講じる必要がある。**表７**では苦手意識をもっていた 20 人中 18 人は，「とてもあった・あった」と回答しており，意欲が高まっていることが分かる。一方意欲が高まらなかった２人を含めた５人は意欲が下がっている。この５人は**表６**で「あまりできなかった」と答えた６人の中に入っており，うまく彩色ができなかったことで意欲が下がっていることが分かった。

エ　題材全体を，作品の鑑賞等を通して振り返らせることで，意欲を高める手立て（鑑賞）

「自分の作品が下手だから見せたくない。」という見せることへの抵抗感をもつ児童が多いので，題材全体を通して「思いを表すために工夫した絵がよい絵である。」という，よい絵についての考え方に気付かせていくと同時に，相互鑑賞において実感できる手立てを行った。

(ｱ) 手立ての具体化

① お互いの作品のよさを認め合えるようにさせる。

終末の相互鑑賞では，お互いの作品のよさを見付け，認め合って終えることができるようにした。相互鑑賞の方法としては，机上に作品と記入用ワークシートを置き，鑑賞した友達がコメントを書き込む方法で実施した（**図 28**）。作品を鑑賞する際は，「作者が思いを表すために工夫したこと」や「自分で感じたよさ」について，色や形といった〔共通事項〕を視点として理由を付けながら記入するようにした（**図 29**）。友達からよい点を伝えてもらった児童は，自分の取組のよさを実感することができていた（**図 30**）。また，ワークシートからは，児童が〔共通事項〕の視点で作品を見ることができているのかを確かめることができ，指導に生かすことができた。

図 28　相互鑑賞の様子

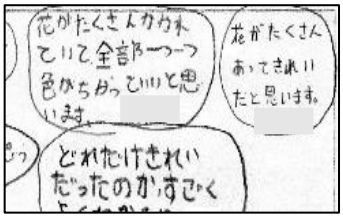


図 29　友達からのコメント

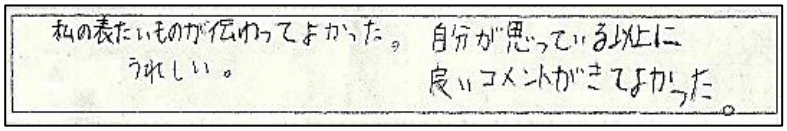


図 30　相互鑑賞後の児童の感想

② 題材全体を振り返らせる。

題材を通して見通し・振り返りワークシートに記入してきた自分の感想や自己評価について振り返らせ，自分の成長を実感させた。これまでと異なる思いを伝える絵を表すことができたことについて満足し，児童は次の題材への意欲を高めていた（**図 31**）。

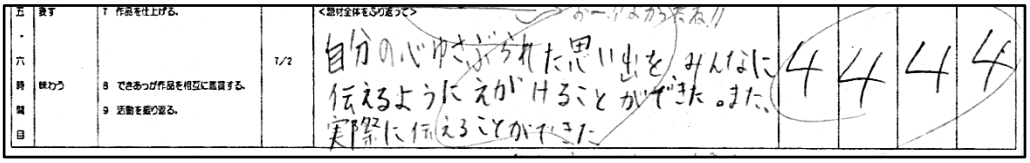


図 31　児童の題材全体の振り返り

(ｲ)　苦手意識の変容

次の**表８**は「相互鑑賞の自己評価」であり，**表９**は「相互鑑賞時の意欲に関する自己評価」である。

表８　相互鑑賞の自己評価

自己評価	４　とてもよくできた	３　よくできた	２　あまりできなかった	１　できなかった
授業後の人数	30 人	４人	０人	０人
苦手意識をもつ児童（再掲）	11 人	１人	０人	０人

表９　相互鑑賞時の意欲に関する自己評価

その時の意欲	４　とてもあった	３　あった	２　あまりなかった	１　なかった
授業後の人数	30 人	２人	２人	０人
苦手意識をもつ児童（再掲）	11 人	０人	１人	０人

表８では「とてもよくできた・よくできた」が，**表９**では「とてもあった・あった」の人数が多いので，概ね目標に達していると考える。しかし，授業前に苦手意識をもっていた児童のうち，**表９**では１人が，意欲が「あまりなかった」と回答している。また，他にも新たに意欲が「あまりなかった」と回答している児童もいた。これらの児童は，「自分は絵が下手だから。」という理由をもっていたので，よい絵とは，思いを表すために形や色を工夫した絵であることを伝え，その児童の作品から思いが表れていることについて称賛した。

(4)　題材全体を通しての四つの苦手なことに対する意識と意欲の変容

図 32 は，苦手なことに対する意識と意欲についての児童の意識の変容である。苦手なことに対する意識・意欲どちらについても数値が３以上で高い水準で推移していることが分かる。ただし苦手意識のある線描については，意欲はあっても線描に納得できていない児童がいることが分かるので，検証授業Ⅱでは，苦手意識を解消できるように，更に効果的な手立てを講じる必要がある。

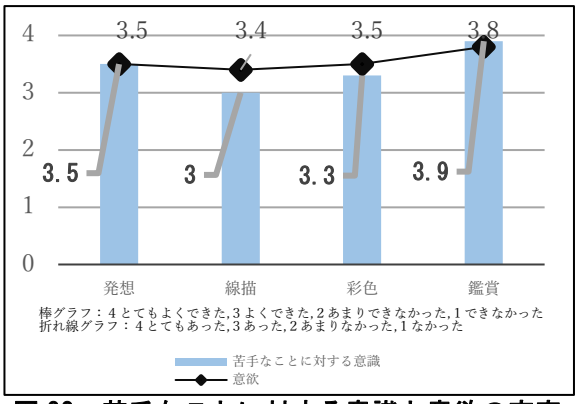


図 32　苦手なことに対する意識と意欲の変容

⑸　検証授業Ⅰの成果と課題

ア　成果

○　思いの大切さについて指導した結果，全員の児童が自分の思いを明確にして，絵に表すことができた。

○　見通し・振り返りワークシートの活用によって，自分の活動を学習過程ごとに振り返らせることができた。その結果，自分の学んだことを実感できていた。

○　イメージマップやアイデアスケッチ，彩色の指導，中間鑑賞等の苦手意識を解消するための工夫が，意欲を高めることが分かった。

イ　課題

○　児童が，表したいものに合った形や色を発想したり，自分のイメージどおりに線描したり，色をつくれたりできるような手立てが更に必要である。

○　資質・能力についての評価をそれぞれの場面で具体化する必要がある。

○　苦手意識と意欲の関連について検証する必要があり，検証授業Ⅱの実態調査や見通し・振り返りワークシートの内容を工夫する必要がある。

６　検証授業Ⅱの実際と考察

⑴　検証授業Ⅱの視点

視点１　意欲を自発的に高め，持続させるための手立ては適切か。 視点２　資質・能力を育成する手立ては適切か。

⑵　検証授業Ⅱの概要

ア　検証授業Ⅱの題材及び実施学年等

題 材 名　「伝えたい，本からもらった感動」（絵に表す） 材　　料　画用紙【四つ切】 対　　象　鹿児島市立玉江小学校第６学年４組　34 人 実施時期　令和２年10月６日，９日，12日【各２時間，計６時間】

イ　題材について

本題材は，本を読んで感動したことを，水彩絵の具等を使いながら絵に表す読書感想画の題材である。どんなところに感動したのかを考え，画面を自由に構成しながら感動を伝えることができるよさがある。その一方で，絵の内容が挿絵の影響を強く受けてしまう題材でもあるので，題材そのものに対する苦手意識をもちやすい題材でもある。本題材でも児童の苦手意識に対して手立てを講じることで，児童が意欲的に絵に表し続けることをねらいとする。

ウ　題材の目標

(ｱ)　知識及び技能

・　本を読んで感動したことを絵に表す活動を通して，形や色の造形的な特徴を理解することができる。

・　表現に適した方法を組み合わせるなどして，表したいことに合わせて表し方を工夫して表すことができる。

(ｲ)　思考力，判断力，表現力等

・　本を読んで最も感動したことの中から主題を設定し，どのように主題を表すかについて考えることができる。

・　作品の表し方の工夫などについて感じ取ったり考えたりし，見方や感じ方を深めることができる。

(ｳ)　学びに向かう力，人間性等

絵に表したり，自他の作品を鑑賞したりする活動に意欲を高め続けながら取り組み，つくりだす喜びを味わうことができる。

エ　題材の指導計画（全６時間）

過程	時間	主な学習活動	指導の手立て 〈視点１〉各過程での意欲を高め続けるア～エの手立て 〈視点２〉主な資質・能力	
			視点１	視点２
思いをもつ・見通す	一次（二時間）	１　題材と出会う。	ア①　児童に興味をもたせるために題材名を工夫して提示する。	発想・構想
		２　参考作品を鑑賞する。	ア②　思いをもち，思いを表すために形や色を工夫することの大切さについて理解させるために，参考作品を鑑賞させる。	知識 発想・構想 鑑賞
		３　学習の流れを知る。	ア③　全６時間の主な学習の流れを提示する。	意欲
		４　感動した本の内容を思い出す。	ア④　絵に表したい感動した本を忘れていたり，見付けられなかったりする児童のために，読書感想画に表す本の例を提示する。	発想・構想
		５　思いをワークシートに記入する。	ア⑤　絵に表したい本の感動を記入させる。（ワークシート）	発想・構想
		６　イメージマップを書く。	ア⑥　感動した本の場面から想起することを，イメージマップに記入させる。（ワークシート）	知識 発想・構想 鑑賞
表す		７　アイデアスケッチをかく。	イ①　イメージマップを基に，前・後等の視点でアイデアスケッチをかかせる。（ワークシート）	発想・構想
		８　中間鑑賞を行う。	イ②　中間鑑賞で，他の児童の作品のよさを見付けたり，線描に向けてのアドバイスを出させたりする。	鑑賞
		９　アイデアスケッチを基に画用紙に指がきする。	イ③　アイデアスケッチを基に，画用紙に線描する大きさを想像しながら指がきさせる。	技能
		10　必要な児童は，図鑑等を参考にする。	イ④　画用紙に線描する際に，人・動物・乗り物等を線描するのに難しさを感じている児童には声を掛け，必要に応じて，図鑑等を参考にさせる。	知識，技能
		11　思いが伝わるように線描する。	イ⑤　思いが伝わるように表情等の形を工夫している児童の頑張りを称賛する。	技能
		12　１～11 の振り返りをする。	イ⑥　振り返りのワークシートに記入させる。	意欲
	二次（二時間）	１　筆洗・パレットの使い方を確かめる。	ウ①ａ　筆洗・パレットの使い方を確認する。	技能
		２　パレットの使い方を確かめる。	ウ①ｂ　パレットへの絵の具の出し方について確認する。	技能
		３　重色の仕方を知る。	ウ①ｃ　混色の方法を，モデルを見せながら指導する。また，重色と混同しないように重色についても再度指導する。	技能

表す	二次（二時間）	4　色の作り方等を知る。	ウ①ｄ　色のつくり方等を，12 色相環図で指導する。	知識，技能
		5　細かい線描個所の彩色の仕方を知る。	ウ①ｅ　細かい箇所の彩色の仕方を，モデルを見せながら指導する。	技能
		6　思いが伝わるように彩色する。	ウ②　本を読んだ感動が伝わるように，色を工夫している児童の頑張りを称賛する。	技能
		7　１～６の振り返りをする。	ウ⑤　見通し･振り返りワークシートに記入させる。	意欲
味わう	三次（二時間）	1　絵を仕上げる。	ウ③④　周囲の友達と仕上げに向けて，話し合わせ，助言等を基に仕上げさせる。	技能
		2　相互鑑賞をする。	エ①　友達のよさを記入させるワークシートを用意して相互鑑賞をさせる。	知識 鑑賞
		3　振り返りをする。	エ②　題材全体での自分の成長を実感させるために振り返りをさせる。	意欲

⑶　検証授業Ⅱの実際

ア～エの①～⑥の手立てはｐ．５**表１**の各過程及び，pp. 17～18 の指導計画の手立てを示す。

検証授業Ⅰで有効だった手立てについては，同じように取り組んだので，ここでは，検証授業Ⅱで特に取り組んだ手立てについて述べる。なお，検証授業Ⅱの事前実態調査において苦手意識についての変化があったので苦手意識をもつ児童の人数が変わっている。

ア　思いをもち，何を表すか思い付くことで意欲を高める手立て（発想）

(ｱ)　手立ての具体化

①　題材に興味をもたせる。

検証授業Ⅱでも，児童が，題材に興味をもって，「よし，やってみよう。」と思わせるような題材名を設定した。教科書『図画工作５・６年下　見つめて広げて』（日本児童美術研究会*7)，2015）での題材名の例は，「物語から広がる世界」であったが，本を読んだ感動を表現させたいと考え，**図 33** の題材名を提示し，伝えることを意識させた。

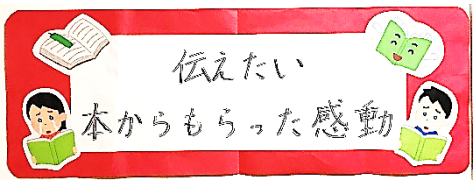


図 33　題材名

②　思いをもち，形や色を工夫して伝えることの大切さに気付かせる。(p. 8②と同じ)

③　学習の見通し・振り返りを通して意欲を高める。

検証授業Ⅱでも，見通し・振り返りワークシートを配付したり，学習の流れ（**図 34**）を提示したりして，意欲を高めた。その際，検証授業Ⅰでは，彩色後に行っていた中間鑑賞を，検証授業Ⅱでは，アイデアスケッチ後に実施することを伝えた。検証授業Ⅰとは，学習の流れが違うことを児童が知り，見通しをもって学習に臨むことができた。

学習の流れ
1　参考作品の鑑賞
2　発想する
3　アイデアスケッチ
4　中間鑑賞
5　線をかく
6　彩色する
7　仕上げる
8　終末の鑑賞
9　振り返る

図 34　学習の流れ

④　読書感想画に表す本の例を提示する。

児童が読書感想画として表したい本を想起できない場合も想定される。読書感想画においては，読んだ本の感動を伝えることになるので，すでに読んだことのある本を思い出させることが大切である。全員が読んだ経験がある教科書の文学的文章教材を「読書感想画に表す本の例」（**図 35**）として掲示し，必要な児童は参考にするように声を掛けた。その結果，表したい本を想起できなかった児童は参考にし，表したい本を選ぶことができていた。

【読書感想画に表す本の例】
※国語で学習した本です。
- **お手紙**
- **スーホの白い馬**
- **ちいちゃんのかげおくり**
- **一つの花**
- **ごんぎつね**
- **大造じいさんとガン**
- **やまなし**
- **海の命**

図 35　本の例

⑤　思いを明確にさせる。

ワークシートに本のどんなところに感動したのかを書かせ，場面を切り取るだけではなく，感動を伝えることが明確になるようにした（**図 36**）。その結果，多くの児童が，表したい思いを明確にもつことができていた。

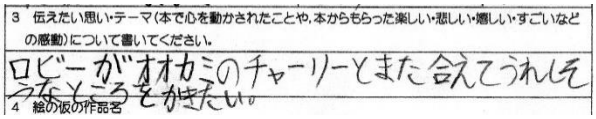


図 36　児童の思い

⑥　思いを広げさせる。

検証授業Ⅱでも，思いを広げさるために，イメージマップに取り組ませた。児童は２回目のイメージマップということもあって，スムーズに記入し，思いを広げることができていた（**図 37**）。児童から，「読書感想画にもイメージマップが使えるんですね。」という声が聞かれ，思いを広げるために，イメージマップが有効であることがうかがえた。

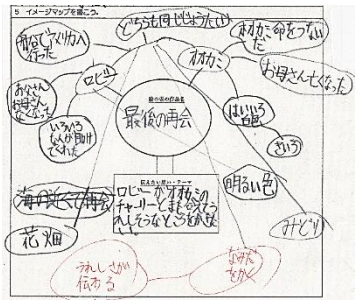


図 37　児童のイメージマップ

(ｲ)　苦手意識の変容

次の**表 10** は「絵で，何を表すか思いつくことについての自己評価」であり，**表 11** は「表したいものを考えた時の意欲についての自己評価」である。

表 10　絵で，何を表すか思いつくことについての自己評価

自己評価	4　とてもよくできた	3　よくできた	2　あまりできなかった	1　できなかった
人数	18 人	15 人	1 人	0 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	6 人	6 人	1 人	0 人

表 11　表したいものを考えた時の意欲についての自己評価

その時の意欲	4　とてもあった	3　あった	2　あまりなかった	1　なかった
人数	23 人	9 人	2 人	0 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	8 人	4 人	1 人	0 人

どちらも「4」と「3」の人数が多いので概ね目標に達していると考える。しかし，授業前に苦手意識をもっていた児童の中で，何を表すか思い付くことが「あまりできなかった」児童が１人（**表 10**），表したいものを考えた時の意欲が「あまりなかった」児童が２人いる（**表 11**）。また，他にも新たに意欲が「あまりなかった」児童もいた。これらの児童は，「感動

した場面がどんな様子なのか思い付かない。」といった理由をもっていたので，次の時間の活動では教師が最初から積極的に話し掛け，児童のイメージが広がるように，本の感動した場面を，「人・物・こと・時・場所・形・色」等を視点としながら会話し，イメージを広げることができた。

イ　思いが伝わるように形を工夫して線描させることで意欲を高める手立て（線描）

(ｱ) 手立ての具体化

① 構図をイメージさせる。

検証授業Ⅱでも，構図をイメージさせるために，アイデアスケッチに取り組ませた。２回目のアイデアスケッチということもあり，本から想像するにも関わらず，たくさんのアイデアスケッチをかくことができ（**図 38**），構図をイメージすることができていた。

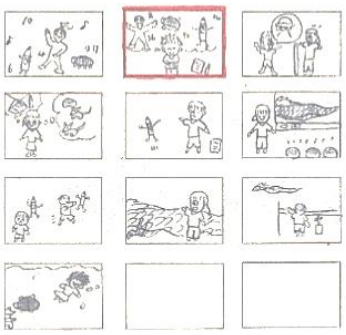
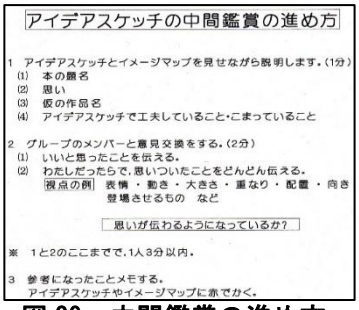


図 38　児童のアイデアスケッチ

② 線描に向けて見通しをもたせる。

検証授業Ⅰでは，彩色の途中で仕上げに向けた中間鑑賞を実施したが，検証授業Ⅱの読書感想画では，読んだ本の内容から，絵に表す内容の全てを発想して画面を構成する必要があり，児童が線描する際に意欲を失うことが予想されたので，線描する前のアイデアスケッチの段階で中間鑑賞を実施することにした。児童が見通しをもてるように進め方(**図 39**)を示してから中間鑑賞を行わせた（**図 40**）。友達からのアドバイスで，参考になったことを，アイデアスケッチや，イメージマップにメモを書き込ませたことで，児童は自分のアイデアに自信をもって線描に取り組むことができていた。



アイデアスケッチの中間鑑賞の進め方

1　アイデアスケッチとイメージマップを見せながら説明します。(1分)
(1)　本の題名
(2)　思い
(3)　仮の作品名
(4)　アイデアスケッチで工夫していること・こまっていること

2　グループのメンバーと意見交換をする。(2分)
(1)　いいと思ったことを伝える。
(2)　わたしだったらで，思いついたことをどんどん伝える。
視点の例　表情・動き・大きさ・重なり・配置・向き
登場させるもの　など

思いが伝わるようになっているか？

※　1と2のここまでで，1人3分以内。

3　参考になったことメモする。
アイデアスケッチやイメージマップに赤でかく。

図 39　中間鑑賞の進め方

図 40　中間鑑賞の様子

③ アイデアスケッチを基に指がきさせる（p. 10③と同じ）。

④ 資料などを参考にさせる。

児童が，人や動物，乗り物などを表したいと思っていてもイメージどおりに表現することができずに，苦手意識をもつことが多い。本物そっくりにかかせるためではなく，児童が思いを達成するために必要とする場合には，図鑑等を参考にすることを提案した(**図 41**）。図鑑等を参考にしながら線描したことでイメージに近付けることができ，線描に満足している児童も多かった。

図 41　教室に準備した図鑑

⑤　形を工夫して線描しているところを称賛する。

図 42 は，児童が本を読んでの感動を伝えるために，表情を工夫して線描している。この児童の作品のように，形を工夫して線描している児童を称賛して意欲を高めた。思いを表すために形を工夫しようと試行錯誤する児童の姿が見られた。

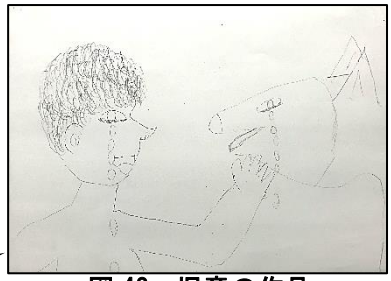


図 42　児童の作品

オオカミと再会できた喜びの涙で，感動したことが伝わってきますね。

⑥　振り返りを通して意欲を高める。

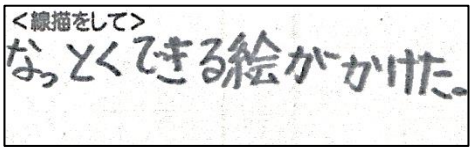


図 43　児童の振り返り

見通し・振り返りワークシートに記入させることを通して，線描等（**図 43**）について振り返らせ，学習でできるようになったことや学んだことに気付かせた。また，次時の学習への意欲を高めた。児童からは「次は，下描きを完成させる。」とか，「次は色塗りを頑張る。」等のつぶやきが聞かれた。

(ｲ)　苦手意識の変容

次の**表 12** は「線描についての自己評価」であり，**表 13** は「線描した時の意欲についての自己評価」である。

表 12　線描についての自己評価

自己評価	4　とてもよくできた	3　よくできた	2　あまりできなかった	1　できなかった
人数	20 人	12 人	0 人	2 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	9 人	4 人	0 人	2 人

表 13　線描した時の意欲についての自己評価

その時の意欲	4　とてもあった	3　あった	2　あまりなかった	1　なかった
人数	18 人	8 人	5 人	3 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	6 人	5 人	3 人	1 人

表 12 から中間鑑賞を線描の前に設定したことで，アイデアスケッチについての意見交換をすることができ，線描の方向性が定まったので，多くの児童が線描については満足していることが分かる。しかし，「できなかった」と回答した２人については，「イメージどおりにかけなかったこと」を理由にしており，次時では，イメージに近づけるための方法について教師が一緒に考え，方向性を見付けさせることができた。

また，意欲面については，**表 13** から「あまりなかった」が５人，「なかった」が３人となっている。児童の言葉から分かることは，本の場面を詳細に思い浮かべることができなかったために満足のいく画面にならなかったことがうかがえる。絵をかく際に本を手元にもって，読み返すことができるような手立てや，逆に内容にこだわりすぎずにイメージを広げられるような手立てが必要であったと考える。

ウ　思いが伝わるように色を工夫して彩色させることで意欲を高める手立て（彩色）

検証授業Ⅰでは自分のイメージに合う色をつくることができなかったことが，意欲の低下につながっていたことが分かったので，次のような色づくりについての指導を行った。

(ｱ)　手立ての具体化

①ａ　筆洗・パレットの使い方を確認する（p. 12①ａと同じ）。

①ｂ　パレットに絵の具を全色出させる（p. 12①ｂと同じ）。

①ｃ　重色・混色について理解させる。

検証授業Ⅰでは混色についての指導を行っていなかったので，混色について説明した。児童が重色と混色について，混同しないように，教師が実際に彩色して，違いについて説明した（**図 44**）。児童は重色・混色等様々な色彩方法で思いを表す姿が見られた。

図 44　混色指導の様子

①ｄ　色の仕組みについて気付かせる。

児童がイメージした色をつくれるように，12 色相環図（**図 45**）を提示して，色のつくり方や，混ぜると濁ってしまう色の関係等について説明をした。彩色する際，12 色相環図を参考にしながら，混色し，彩色する姿が見られた。

図 45　12 色相環図

①ｅ　細かい箇所を彩色させる。

色が意図していないところにはみ出したり，思ったような色でなかったりした時には，ティッシュで色を拭きとって修正できることを伝えた。細かい箇所で鉛筆の線をはみだして彩色した際，色をティッシュで拭きとる姿が見られた（**図 46**）。

図 46　ティッシュで拭きとる様子

②　色を工夫して彩色しているところを称賛する。

ただ彩色するのではなく，思いを表すためにということを意識しながら彩色する児童の姿が多く見られた。**図 47** は，児童が彩色した作品である。思いを表すために，重色等を行っている。このように思いを表すために，色を工夫して彩色した児童を称賛した。さらに思いが表れるように，彩色を工夫しようと試行錯誤する児童の姿が見られた。

図 47　児童の作品

③　仕上げの彩色に向けて見通しをもたせる。

④　仕上げを意識させる。

中間鑑賞会は設定しなかったが，授業の中で，随時，近くの友人とアドバイスをさせて，仕上げに向けて意識を高めた。

⑤　振り返りを通して意欲を高める。

見通し・振り返りワークシートに記入させることを通して，彩色したこと等について振り返らせ(**図 48**)，できるようになったことや学んだことに気付かせた。また，次時の学習への意欲を高めた。児童からは，「次は，納得のいくように絵を完成させたい。」等のつぶやきが聞かれた。

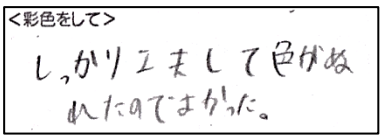


図 48　児童の振り返り

(ｲ) 苦手意識の変容

次の**表 14** は「彩色についての自己評価」であり，**表 15** は「彩色した時の意欲についての自己評価」である。

表 14　彩色についての自己評価

自己評価	4　とてもよくできた	3　よくできた	2　あまりできなかった	1　できなかった
人数	21 人	7 人	4 人	2 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	7 人	3 人	2 人	2 人

表 15　彩色した時の意欲についての自己評価

その時の意欲	4　とてもあった	3　あった	2　あまりなかった	1　なかった
人数	23 人	8 人	1 人	2 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	9 人	3 人	1 人	1 人

表 14 では，彩色についての自己評価が低い結果となっているが，これは，検証授業Ⅰよりも倍の大きさの四つ切サイズの画用紙だったため，彩色の時間が不足し，満足いく彩色ができなかったことが大きな原因である。一方，**表 15** の意欲については，時間内に完成させたいという思いから，集中して彩色しており数値が高くなっている。

エ　題材全体を，作品の鑑賞等を通して振り返らせることで，意欲を高める手立て（鑑賞）

(ｱ)　手立ての具体化

①　お互いの作品のよさを認め合えるようにさせる。

検証授業Ⅰと同じように実施した相互鑑賞であったが，鑑賞に際して改めて〔共通事項〕を視点として理由付けを行うように指導したところ，検証授業Ⅰよりも詳しいコメントが増え（**図 49**），さらに思いを伝えることができた。

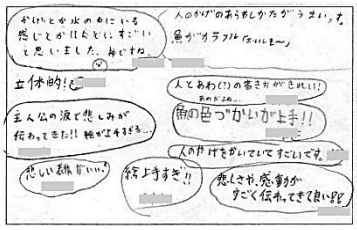


図 49　友達からのコメント

②　題材全体を振り返らせる。

学びの深まりを引き出すために検証授業Ⅱでは，見通し・振り返りワークシートの最後に題材を通して学んだことを書く欄を設定した。多くの児童が「よい絵」について書いており，実感できていることが分かった（**図 50**）。また，児童からは「絵をかくのが好きになった。」等の感想も出され，題材全体を振り返ることができていた。

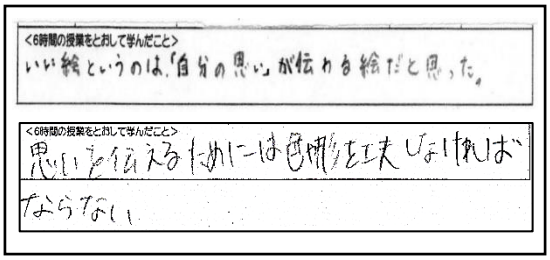


図 50　振り返りのコメント

(ｲ)　苦手意識の変容

次の**表 16** は「自分の作品を見せることの自己評価」であり，**表 17** は「自分の作品を見せた時の意欲に関する自己評価」である。

表 16　自分の作品を見せることの自己評価

自己評価	4　とてもよくできた	3　よくできた	2　あまりできなかった	1　できなかった
人数	22 人	11 人	1 人	0 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	5 人	2 人	0 人	0 人

表 17　自分の作品を見せた時の意欲に関する自己評価

その時の意欲	4　とてもあった	3　あった	2　あまりなかった	1　なかった
人数	26 人	5 人	3 人	0 人
苦手意識をもつ児童（再掲）	5 人	1 人	1 人	0 人

表 16，**表 17** のどちらにおいても，「4」，「3」の人数が多いので，概ね目標に達していると考える。しかし，数名の児童が依然として絵を見せることに抵抗があることが分かる。これは以前からもっているよい絵についてのイメージを変えることができなかったことと作品が仕上がらない状態で作品を見せたくなかったことが原因であると考える。よい絵についての考え方を変えていくためには，導入場面からより一層丁寧な手立てをとったり，年間を通じて繰り返し取り扱っていく必要があると考える。また，作品を仕上げるためには，十分に試行錯誤しながら彩色する時間が必要であるが，今回の題材では不足していたと考える。今後，各題材の適切な時数について考えていく必要がある。

⑷　資質・能力についての評価の具体化

見通し・振り返りワークシートを活用し，児童に自己評価を行わせたことで，児童一人一人の状況を明確に把握することができた。また，検証授業Ⅱでは，「資質・能力の評価計画表」（**図 51**）を作成して，事前に評価規準を具体化し，計画したことにより，指導と評価の一体化に生かすことができた。

資質・能力		評価規準の具体化	評価方法
知識		○　思いをよりよく表現するのに色・形などの（共通事項）を視点として工夫することが大切であることに気付いている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　児童の様子（対話，つぶやき，題材全体を通して） ○　鑑賞ワークシート
技能		○　思いが伝わるように，アイデアスケッチを参考に，形を工夫して線描している。	○　見通し・振り返りワークシート ○　線描した作品 ○　児童の様子 （試行錯誤しながら形を工夫している。）
		○　思いが伝わるように，基本的な彩色方法に気を付けながら重色や混色を工夫して彩色している。	○　見通し・振り返りワークシート ○　途中の作品 ○　児童の様子 （試行錯誤しながら色を工夫している。）
思考・判断・表現	発想・構想	○　絵には思いが表現されていることに気付いている。	○　事後アンケート ○　児童の様子（対話，つぶやき）
		○　本を読んで，絵に表したい思いを明確にするために，ワークシートに，思いを詳しく書いている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　ワークシート①（思い） ○　児童の様子（書いている様子）
		○　絵に表したい思いを基に，想像を広げてイメージマップを書いている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　ワークシート①（イメージマップ） ○　児童の様子（書いている様子）
		○　イメージマップを基に，いろいろな視点でアイデアスケッチをかいて構図を試している。	○　見通し・振り返りワークシート ○　ワークシート②（アイデアスケッチ） ○　児童の様子 （かいている様子，試行錯誤する様子）
	鑑賞	○　相互鑑賞を通して，友達の絵から，思いが伝わるように形や色で工夫されているところのよさを，見付けている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　鑑賞ワークシート ○　児童の様子（書いている様子，読んでいる様子）
主体的に，学習に取り組む態度		○　お互いのアイデアスケッチのよさや，線描に向けた助言を伝え合おうとしている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　児童の様子（対話と助言，感想）
		○　題材全体を振り返ろうとしている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　交換わら絵の取る ○　児童の様子（対話）
		○　題材全体を通して，意欲的に前書感想画に取り組もうとしている。	○　見通し・振り返りワークシート ○　児童の様子（試行錯誤する様子） ○　作品（思いが表現できるように工夫したところ）
		○　時間内に完成するように，見通しをもって取り組もうとしている。	○　児童の様子 ○　見通し・振り返りワークシート ○　作品（進み具合）

図 51　資質・能力の評価計画表

⑸　題材全体を通しての四つの苦手なことに対する意識と意欲の変容

図 52 は，検証授業Ⅱにおける苦手なことに対する意識と意欲についての児童の変容である。事前の実態調査での「発想」，「線描」，「彩色」，「鑑賞」の四つの苦手意識が，授業の中で全て改善されており，意欲も高く維持されていることが分かる。これまで取り組んできた絵に表す授業においては，次第に児童の意欲が低下していくのを感じていたのに対して，本実践では，児童が授業の最後まで自分の思いを意欲的に表現しようとする姿が見られた。これは，苦手意識を解消するための手立てを積み上げた成果であると考える。

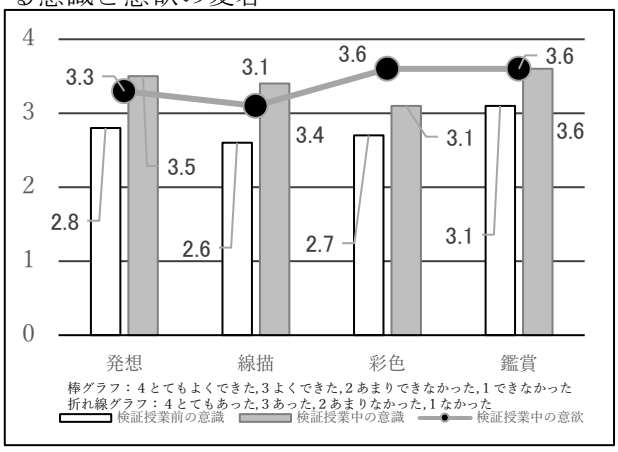


図 52　苦手なことに対する意識と意欲の変容

⑹　検証授業Ⅱの成果と課題

ア　成果

○　読書感想画に表す本の例を示したり，イメージマップをかかせたりするなどの手立てを講じたことにより，発想に苦手意識をもつ児童の苦手意識が解消され，発想できていた。

○　アイデアスケッチの中間鑑賞を行ったことにより，線描に苦手意識をもつ児童の多くが，構図のイメージを広げることができていた。また，かきたいのに形をかけないものについて図鑑等を参考にした児童は，自信をもって線描することができていた。

○　相互鑑賞でお互いの作品のよい点を分析して伝え合う活動等，よさを認め合う手立てを講じたことにより，児童のよい絵についての認識が変化してきた。その結果，自分の作品を見せることに苦手意識をもつ児童の苦手意識が解消された。

イ　課題

○　全６時間では，絵を納得するまで表しきれなかった児童が多く存在した。適切な時数の設定を含め，児童が十分に試行錯誤しながら表現できる題材の全体計画を考える必要がある。

Ⅳ　研究のまとめ

１　成果

⑴　児童への実態調査から，児童が思いを意欲的に絵に表せない原因は，「何を表すか思い付かないこと（発想）」，「イメージどおりに線描できないこと（線描）」，「イメージした色をつくることや，思いどおりに彩色することができないこと（彩色）」，「自分の作品を見せるのに抵抗があること（鑑賞）」等の苦手意識であり，育成すべき資質・能力と関連があることが分かった。

⑵　児童が思いをもち続け，意欲的に絵に表す授業をつくるためには，導入場面で意欲を高めることだけでなく，展開以降の場面でも，思いを意欲的に表現するための壁となっている苦手意識を解消できるような手立てを講じることが必要である。苦手意識を感じていることに対してどのように取り組めばよいのか見通しをもって活動に取り組ませることが，意欲を高めることに有効であることが分かった。

⑶　絵に表す活動を通して育成すべき資質・能力を，「発想」，「線描」，「彩色」，「鑑賞」の各場面で具体化し，指導と評価の一体化に生かすことができた。その結果，資質・能力を発揮している児童が多く見られ，苦手意識をもっていた児童も自己の表現に満足していた。

２　課題

⑴　苦手意識を解消していくためには，児童の現状を確かめながら既習事項を確認しつつ授業を行うことが大切なので，各学年で学習する内容と，そのための手立てを明らかにする必要がある。

⑵　時間内に彩色が終わらないことで，彩色についての苦手意識を解消できない児童もいる。資質・能力を十分に育成するためには，導入で思いを高めることや表現活動における試行錯誤，終末の相互鑑賞や振り返りまで，全ての活動が必要だと考える。教育課程編成の際，児童の実態に合わせて各題材で必要な時数を改めて設定し，年間指導計画を見直す必要がある。そこで，次頁の参考例のように全８時間の題材計画を作成した。

〈参考例：全６時間を全８時間に変更〉

<table>
<tr><th>学習過程</th><th>時間</th><th>学習内容</th><th>用意するもの</th></tr>
<tr><td rowspan="2">思いをもつ・見通す</td><td rowspan="3">二時間</td><td>1　参考作品を鑑賞し，作者の思いや，思いを表すために工夫した形や色について考える。〔共通事項〕に気付く。</td><td>参考作品</td></tr>
<tr><td>2　学習の流れや，見通し・振り返りワークシートで，学習の見通しをもつ。
3　絵に表したい思いを考える。
4　思いから発想を広げるために，思い浮かぶものをイメージマップに書く。
5　イメージマップを基に，場面や前・後・左・右・上・下等の視点を変えながら簡単なアイデアスケッチに表す。</td><td>見通し・振り返りワークシート

ワークシート①（思い）
ワークシート②
(イメージマップ)
ワークシート③
（アイデアスケッチ）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">表す</td><td>6　アイデアスケッチを基にして，思いが表れるように，形や構図を工夫して線描する。
7　第１次を振り返る。</td><td>描画材，画用紙</td></tr>
<tr><td rowspan="3">五時間</td><td>8　思いが表れるように，色を工夫して彩色する。試行錯誤を繰り返す。</td><td></td></tr>
<tr><td>9　中間鑑賞で，自分の絵に表したい思いと，思いを表すために工夫した形や色を友達に伝える。また，互いに作品の仕上げに向けたアドバイスを行う。
10　第２・３次を振り返る。</td><td>ワークシート④（中間鑑賞）</td></tr>
<tr><td>11　思いが表れるように，形や色を工夫して仕上げを行う。</td><td></td></tr>
<tr><td>味わう</td><td>一時間</td><td>12　相互鑑賞で，〔共通事項〕を通して，お互いのよさを見付け，伝え合う。
13　題材全体を振り返る。</td><td>鑑賞シート</td></tr>
<tr><td colspan="4">※　中間鑑賞は，題材の中で適切な場面に設定する。
※　備考のワークシートは，学級の児童の実態を基に作成する。</td></tr>
</table>

このように全ての題材において，資質・能力を育成することができる学習内容を設定しながら，年間指導計画を作り直していく必要がある。

〈引用文献〉

1）櫻井　茂男　著　『自ら学ぶ子ども　４つの心理的欲求を生かして学習意欲をはぐくむ』　2019 年　図書文化社
2）文部科学省　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編』　2018 年　東洋館出版社
3）鹿児島県総合教育センター　『小学校学習指導要領解説Ｑ＆Ａ図画工作科』　2018 年
4）堀　裕嗣　著　『よくわかる学校現場の教育心理学―ＡＬ時代を切り拓く 10 講―』　2017 年　明治図書出版
5）文部科学省　『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　図画工作編』　2018 年　日本文教出版
6）辰野　千壽　著　『科学的根拠で示す学習意欲を高める 12 の方法』　2009 年　図書文化社
7）日本児童美術研究会　『図画工作科５・６年下　見つめて　広げて』　2015 年　日本文教出版

〈参考文献〉

○　岡田　京子　著　『成長する授業　子供と教師をつなぐ図画工作』　2016 年　東洋館出版社
○　鹿児島県総合教育センター　『指導資料　図画工作科・美術科第 44 号』　2018 年
○　岡田　京子　著　『世界一わかりやすい!会話形式で学ぶ, 図画工作科の授業づくり』　2018 年　明治図書出版
○　大橋　功　監修　『美術教育概論（新訂版）』　2018 年　日本文教出版
○　鹿児島県総合教育センター　土曜講座資料『絵に表す活動の指導』　2019 年
○　国立教育政策研究所教育課程研究センター　『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校図画工作】』　2020 年　東洋館出版社

長期研修者　［山下　泰弘］
担 当 所 員　［福森　真一］

【研究の概要】

本研究は，児童が思いを意欲的に絵に表す授業づくりについて研究したものである。

児童が絵に表す活動の時間に，活動への意欲を失ってしまう原因は「絵に何を表すか思い付かない（発想）」，「イメージ通りに線描できない（線描）」，「イメージ通りに彩色できない（彩色）」，「自分の作品は下手だから見せたくない（鑑賞）」の大きく分けて四つの苦手意識にあることが分かった。この「児童の苦手意識の実態」と「絵に表す活動で育成すべき資質・能力」，「意欲を高める手立てのポイント」を基に，各過程での手立て及び評価を明らかにし，実践を積み重ねたことで，児童は高い意欲を保ったまま，絵に表す活動に取り組むことができ，苦手意識の解消や資質・能力の成長を実感することができていた。

本研究を通して，思いを意欲的に絵に表す授業づくりには，児童の苦手意識を解消していく視点が必要であり，解消するための手立てを講じることが，意欲を高めることにつながることを明らかにすることができた。

【担当所員の所見】

本研究は，絵に表す活動の授業に，どうしても意欲的に取り組めない児童がいるという状況を基に，「全員が意欲的に絵に表す活動に取り組める図画工作科の授業づくり」を目指した優れた実践研究である。

まず，児童が意欲的に取り組めない原因を苦手意識にあると想定し，実態調査の分析を基に，大きく「発想」，「線描」，「彩色」，「鑑賞」の四つの苦手意識に整理したこと，そして，その苦手意識と，絵に表す活動において育成すべき資質・能力との関連性に迫ったことに大きな価値がある。

次に，文献研究を通して，学習意欲を持続させるためには「適度な刺激」が重要であることに着目し，「苦手意識を解消するための手立て」こそが，この「適度な刺激」につながると捉え，作成した「意欲を高める手立てのポイント」と共に，本研究の理論的基盤とすることができたこと，そして，苦手意識を解消するための手立てを工夫した結果，児童が高い意欲を保ったまま絵に表す活動に集中して取り組むことができた実践を通して，論を証明できたことが素晴らしい。

本研究は，図画工作科の授業づくりを目的としているが，授業を改善していく際の視点として，全ての教科等で有効であり，広く価値のある提案となっている。

今後は，本研究を更に発展させ，児童の苦手意識を念頭に，各学年の学習内容と育成すべき資質・能力を分析し，必要な手立てを明らかにするとともに，児童の実態に応じた題材計画及び年間指導計画の作成を行い，全県下のモデルになることを期待している。